

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

告白

二人の子を失っている彌兵衛にとって、勘六は掛替えの無い、たった一人の息子だった。けれども、親子並んで一つの目標に向かう幸せは、ほんの束の間の夢だった。享保十年（一七二五年）二月、彌兵衛の案じた通り、勘六は作業中に岩の上で倒れた。意識不明の状態が続き、勘六は生死が危ぶまれた。

この時は、さすがに彌兵衛も勘六の側を離れなかった。クニは、何も喋らず、ただ黙々と勘六の看病に明け暮れた。

疲れた様子のクニの立ち居振る舞いに、彌兵衛は、

——クニも歳をとったものだ。——

と、ドキリとさせられ胸が痛んだ。クニの物言わぬ後姿が、宿命を背負い必死で受け止めていることを語っていた。

両親の必死の祈りが天に通じたのか、勘六の意識が戻ったのは、勘六が倒れてから三日も経ってからのことだった。

勘六は心配げに覗き込む彌兵衛とクニに、話したいことが有ると告げた。

「よい、よい、今、話さなくとも、元気になってから話せば良いではないか」

彌兵衛はたしなめたが、勘六が聞く耳を持たなかった。

「父上、私に残されている時はもうほんの僅かしか無いのです。このことを父上にお願ひしないうちは、お別れするわけにはいかぬと……」

勘六は、ポツリ、ポツリと喋り、肩でハアハア荒い息を繰り返した。



画 寺戸良信

「それは、つるのことだな」

彌兵衛は堪り兼ねて、つるの名を口にした。

勘六の顔に驚きの表情が浮かび、やがて、それは安堵の表情となり、見開いた目からは、涙が溢れた。

「父上：知っておられたのですか……」

彌兵衛は、そっと勘六の手を握った。

「知っていたとも、ゆうによう似た利発な子のお。おまえの方こそ、つるがわしに会いに来ていたのを知らないであろう。つるのことは、一日たりとも忘れたことは無いわ。おまえが、つると嫁を引き取りたいと言ひ出すのを、今日か今日かと待ち兼ねておったわ。五郎太にすぐを迎えに行かせよう。いったいどこへ行けば良いのだ」

彌兵衛の心は逸った。

つるは、日吉村の隣、大庭村の母方の親戚に預けられていた。

彌兵衛に最後に会ってから間もなく母を亡くし、そのまま祖母に育てられたが、その祖母もすでに他界。伯父夫婦のもとで、幼い従弟たちの世話をしながら肩身の狭い暮らしを送っているという。

勘六は苦しい息をしながら言った。

「総て、若い日に私が父上の心を解ろうとせず父上に背いて家を出て行った報いです。一所懸命、村のために総てを捧げておられる父上には、とても言えなかった」